【 59 】

氏名	駒 井 正 昭
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第1123号
学位授与の日付	昭和５５年６月３０日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 （学位規則第５条第２項該当）
学 位 論 文 題 目	**幼犬下顎骨骨折治癒過程の血管像変化に関する実験的研究**
論 文 審 査 委 員	教授 大内 弘　教授 小川 勝士　教授 小倉 義郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

小児の顎骨骨折は，顎骨その他の組織の成長発育と同時に歯の萌出，歯の交換，咬合関係にとっても重大な影響をもたらす。適切な処置がなされなければ種々の障害を招く。

著者は，骨周囲線結紮固定法を用いて，幼犬下顎骨骨折後の治癒過程において血管新生，仮骨形成はどのような様相を呈するかを検索する目的で，クロロパーチャ血管注入法により，血管像の変化を立体的，形態的に観察し，さらに肉眼的，X線的，骨シンチグラム，病理組織学的にも検討し，以下の結果を得た。

1）４日目には近・遠心側ともに細い毛細血管がみられ，７日目血管網形成，１０日目には毛細血管は全体的に太くなった。３０日目では血管の太さは一様となり骨折部の血管走行は周囲顎骨と区別できない程度に回復，４０日目にはほぼ正常像であった。

2）病理組織学的には，１０日目では全体にわたって線維性結合織の増生により完全に修復され，基底部では骨の新生がみられた。３０日目には骨新生が著明で下端部では架橋，６０日目には仮骨はほぼ完了していた。

3）骨シンチグラムにおいて，骨折部位の集積量は２０日目で最高値を示した。これはX線所見で骨の添加と思われる粗な不透過像を呈した時期，また骨折断端部の吸収がほぼ終了し，骨の再生が起こる時期と一致していた。

4）肉眼的には，１５日目では骨折部の動揺はほとんどなかった。実験側第２・第３乳臼歯は対照側同各歯と比較してやや動揺がみられ，開咬気味であったが，１０日経過するとほぼ正常となった。

血管像所見，病理組織学的所見，X線的所見，骨シンチグラム，肉眼的所見においてある程度相関関係が認められた。

論文審査の結果の要旨

本研究は，幼犬で実験的骨折の治癒過程を血管像を中心としX線所見，骨シンチグラム，組織像と比較して研究し，これら諸所見の関連と推移を明らかにしたもので，小児下顎骨骨折の治癒に重要な基礎的知見を加えた価値ある業績と認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。